

り、書寫後によく根柢に似たれども紙につか
ず。

ねざめ

次條を見よ。

ねざめさげぢゆう 萬事を夢と飲上
げし寢覺提重・五升樽、坊主持し
て北うづむ(安懸)

〔寢覺提重(提重)その味を見よ)の手輕なのを
いひ、當座の馳走品を徳男一對を容れて携帶
に便にしてある。好色二代男(貞亨元年刊)卷
三、樂助が親類の條に「幫間持に遊戯を見る
に、四年半に七十六兩一歩、藤敷三、其他鼻
紙入二度、寢覺の提重、桐の狹楯、云云」と見
主水と京の唐土との條に「四十六匁に差詰り
て宛や角物思ふを、爰はと取持つて不思議に
寝る寢覺提重を賣拂ひて吉之丞が萬事として
はせ云云」とあるより見れば古道具としての
寢覺提重の實價は四十六匁程であつた。浮世
花鳥風月(正徳三年刊)花之部に「寢覺の提重に
暫しは明後敷に廣げと寢覺提重を預ける、
頭の黒き鼠に懸、是は奈しと榮華も爰に開
き、鶴蒲餅の切形きやしや過ぎて氣に入ら
ねと、鶴一對を明らかにしてげり。寢覺提重
を略して寢覺と云うたことは、江島其碩
撰 寢覺後者氣屬下之卷に「もたせのねざめ
ひらきてさし梅のかんをさせ」と見えあ
果林子作生玉心中に、「花の紋日をこの床で
二人寢覺の小杯」とあるのも、寢覺提重の小
杯をいうたのである。

ねずみきど

鼠が食破りし所なれば、此所より人の出入させんとて
鼠木戸と名づけ、今の世にいたつ
て諸芝居の鼠木戸と申す事此時よ
りも始まれり(井筒)

〔鼠木戸芝居小屋の板壁に小さい藩戸二つを
設けて入口としたもの稱。薩州府志古蹟

門上(愛宕郡の條に「芝居。……芝居外門兩
上高設床外張幕、其體似破樓、故稱樓、
下樓下板壁設小屋二箇所、是稱鼠木戸、
入芝居人鼠曲背肩、越門而入之如
鼠之入穴、鼠戸之傍設床、代札於鑪而賣
之云云。劇場訓蒙圖彙卷二)に鼠木戸。三
馬按ずるに鼠木戸の名は上方より起れるが、
京大坂の芝居は角力場の木戸の如く板壁に
小さい口二つあり、これを鼠木戸と云、其
いはれば芝居(入)人肩背をかがめて、鼠の
穴に入る如き故名付くるものなり、江戸芝居
は入口四ヶ所あれども、木戸番の左右に小
き口二つを鼠木戸と云、一説に不祥事門と
云、尤社擲擲するに足らず、竹豐故城門と
云、城戸と云は城郭に準じて竹切なる名目な
り、後世城の字を恐れ鼠木戸と稱す、又見物人
の木札を改め取、一人死に入る體、鼠の小
き穴を濟るに似たる故俗に鼠木戸と云習はせ
り。鼠木戸は戰國時代の餘風であるが、元
祿以前既に普通の出入口に改造されたのが
多し。

鼠の尾花

(用明天皇)

濡衣の別稱である。「みぞはぎを見よ。
*ねする 遣ひすてたのげしいたの
と、ねするるるを苦にしてか、今
朝町へ出て暮るるまで待てども待
てども歸らぬ(會根崎) あによめ
のねすりごと聞づらや聞にくや
(重井筒) 仕事は常より精出せど
も、きさにすねごとねすりご
と(今宮)

いやみやぶあてこする。「ねすりごとは、
いやみやぶあてこする。倭訓栞、ねすりのころ
もの條に「高陽院歌に旅人のねすりのころ
ものよめるを、別者經をいはずかたせたるは
おぼつかなしとぞ、ねすり言といふ是より
出たるにや。」

*ねた

私をけぶたさうにして、そな
たの文を焼いて棄て居つたも見て
ある、それをねたに思つて、針を
棒に取りなして此様にしなした
(大經師) きさきと懇致せしを由兵衛
めがれたに(今宮)

「ねたし」(妬)の語根を名詞に用ひたもの。宿
憤。遺恨。和訓栞に「ねたむ。媚嫉をいふ。
日本紀に妬又憤恨をもよめり、宿憤の義、宿
憤の意なるべし。「ねたにこみ」とは、遺恨
に思ひ込みの意。

*ねだれる

二十五日に落した判を
八日に捺されうか、さてはそちが
拾うて手形を書いて判を捺ふ、お
れをだつて銀取らうとは謀り、お
りも大罪人(會根崎) ねだれ者かし
らぬ粗相すな夕曇)

ねぢぼう

「よりぼうを見よ。

ねぢみやくしやんと打ちませうと
手をひろげても、イヤまあ打つま
い、ハテれちみやくした、そんなら
舅御夫婦も乗物やちやちや馬と、
乗せてもいかな乗らばこそ(萬年草)
ぐぐぐとねつかい。執着。今様二十四孝
(寶永六年刊)卷之五、目の玉つかりかへし
大因果の條に「花もさこそ人も見るらん世
を、ねばうかたらねちみやくするは、鬼も笑
はんあすの事云云。和訓栞、ねぢるの條に
「ねちみやくといへる俗語も熱眼なるべし。」

ねつそり

ヤアねつそりの牛盗人、
ちよろい工のあめだ牛、まうまう

外に同類ないか(關八州)
鼠。和訓栞に「ねそ。俗に重厚簡略なる人
を諷す、ねりその略にや、ねつそりといふ
ふり。」

ねつたい

ねつたい佐佐木殿、功名
せうとて不覺ばしし給ふな靈明
寺殿) すんばる坊主。ねつたい坊
主。鉢坊主、これがお寺の長助と、
笑つて、そば追立てける(會根山)

*ねどひ

さてもねどひする衆
や(釋迦)

「根問根本まで問ひただす義。しつこく問ふ
こと。饅頭屋本・節用集に「重問」
こと。饅頭屋本・節用集に「重問」
子の年 豊かなる年は子の年、大
黒女夫力次第に子孫もわき出
る(反魂香)

*子の日

千年までかぎれる松も今
日よりば、君にひかれて萬代や經
んと、子の日の松の行末も久しか
るべき例ぞと、君を祝ひし名歌な
り(百日日賀)

正月初子の日といふ。この日昔は野山に出て
小松をひいたものである。和歌選林抄に、
「春の初子の日、野邊に出て、小松をひきつ
つ、人をも身を祝ふなるべし。」當家文章
に「子亦替開手故老、曰上陽子日遊賦老」
拾芥抄に「正月子日昼に登るは何ぞや、傳云

「春の初子の日、野邊に出て、小松をひきつ
つ、人をも身を祝ふなるべし。」當家文章
に「子亦替開手故老、曰上陽子日遊賦老」
拾芥抄に「正月子日昼に登るは何ぞや、傳云

正月子日岳に登るは遠く四方を望み、陰陽の
静養を得煩悩を除くの術なり。「千年まで限
れる云云」を見よ。

***ねはん** 弘誓の海を渡り涅槃の岸
に至るべき(百日曾我) まださきざ
ぎの膾炙や、涅槃の雪の名残の門
(歌念佛) 或夜この海底に、涅槃經
の四句の文梵音聲にて唱ふる、と
あらたに繁夢を感じ(用明天皇)

〔涅槃梵語 Nirvāṇa〕 寂滅などと譯し、生
死を超越し不生不滅の眞理を證得し、常樂我
淨の理想境をいふ。ついでに極樂淨土の意
にもいひ、聖者の逝去を涅槃に入るとい
ふ。五十年忌歌念佛のこの文の涅槃は、涅
槃窟のことである。釋尊は二月十五日に入滅
されたにより、後世この日に追善法會を齎む
として、雪は涅槃窟の頃から降らなくなるとい
ふに據つたのである。

〔涅槃經は大般涅槃經の略。釋尊が入滅の期
に臨んで大衆に向つて深理を説かれた經文で
ある。〕 涅槃經の四句の文とは、涅槃經に見
えてある有名な四句偈即ち「諸行無常、是生
滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」の文をいふ。

ねびもの 一萬といひし時よりも兄
十郎はねび者にて、倉忍せぬ生付
き(會稽山)

〔ねび〕は年の程よりもおとなびたるを云ふ。
老成者。源氏物語「玉葛の巻に、「この君ねび
とこのひ給ふまに」。同「輪の巻に「輪形も
いとまよ、ねびまよせ給へるを」。
ねまつり お寺方の大黒と、晝は隠
して長持に入れて二股大根や、
夜は抱かれて子祭の寝は致すま
じ(松風)

〔子祭〕十一月甲子の日に行ふ大黒天の祭事を
いふ。日次紀事(延寶年中)十一月の條に
「凡諸商此月子日時祭之(大黒)」。蓋實業之
間取、其利也。欲比鼠子之蕃息也、云云。
この文は、お寺方の大黒と云ふたので、大
黒天に縁ある子祭と云ふを用いたので、
その子祭に饗宴をいひかけて、房事をきかせ
たのである。

ねまる 御荷物積んでなげ船にねま
らないと、北國訛の半髪額川中島
軍右衛門がねまり申して手をつか
へる、こりやき拜み申す呉れ申
せと(番庚申) 大星由良之介殿と
いふは此屋臺にねまりめさる
か(藝談本平記)

〔坐〕坐す。うづくまる。よつて又「居る」の
意にも云ふ。下學集「能藝門に「坐」。現今も
石川縣羽咋郡地方にては「坐」を「ね
まる」といふ。序云、淺井了意撰「東海道名所
記、日坂の條に「山がちのねまり申したる
よな、大飯かきし給ふべいな」とある。ね
て夜をぶちあかして腹ぼてるまに、夢に
まり」は眠る意に用いたのである。

ねや 杉の梢を日常にして、暫し保
つて放つ矢が、一二の枝にはた
ばたと、根矢の立たる如くな
り(五人兄弟)

白でなくて薄薔びを帯びたもの。
***ねりしゆ** 藤の棚のれち兵衛は此
方ほど鐘け振られども、お祓の練
衆御番替り人の氣に入り分戀人
にも知られし粉屋の孫右衛門、祭
の練衆が氣遣ひか、遂に指さぬ大
小はつ(み天編鳥)

〔練衆〕大阪諸社の夏祭には練物を用す、就中
座摩社・天満宮等の御祓の練物は殊に盛んな
もので、鐘兜を着込み大小や旗印等を指した
武者の假裝行列などがあつた、これを練衆と
いふ。御遊覧(無軌道遊覧 延寶八年刊)第
三(座摩御祓(六月二十二日)の條に「ねりも
の、母衣掛武者立花砂の物色のつくり物に
美を盡し、今の渡邊筋より本町掛筋へ出で、
高麗橋を渡り、大津町の御祓所まで」と
あつて武者の假裝行列圖を載せ、又同書「天
満天神御祓(同二十五日)の條に「御神事ねり
も、引山三方面にして、内に兒或は花笠を
きたる子どもに踊らせ、或は異類異形に出で
立たせ、さまざまの藝づくし、……、また
桶衣かけ武者、小具足、いつたるあり、天神
御道をおわたり、練貫の邊まで行く、天神
上製(兼好)

***ねりぬき** 練貫の單き(會稽山)
ひやうもんの練貫にから縫したる
上製(兼好)

〔練貫〕練貫の義。生絲を經とし練絲を緯とし
て織つた綿布。
ねりぬきみづ 練貫水の 大津
酒(反魂香)
〔練貫水〕原田龜六撰、淡海錄(元祿元年の自
序がある)「水井池の條に「大津練貫」三井の
窟に涌泉有、海水井水より目にかけて經き冷
水也、酒をかもし茶を煎するには此水を用ゆ、
庭訓に云、大津ノ練貫と出ず、池邊に禪寺有、
大練寺と云。

ねりものや いざ屏風屋の小陰に
て、君と我とはねり物屋(用明天皇職
人戀) 向ひのねり物屋の灰毛猫は
憎らしいいぶたうな顔で(天經師普磨)
〔練物屋〕諸練物を練り固めて細細、寶石など
に接作し、またはこれを商ふ家。
根を掘る竹の伏見町

〔鹿ますの敷ならば云云〕を見よ。
***ねんじや** 馬追うて一代若衆にな
らずに生えぬきの念者ぢや(丹波
興作) 此道に高下はない、其小一
兵衛も呼出し並べて置いて念者に
頼む(番庚申) 念者坊の祈辨様は踏
殺すとして煮えさつしやる(萬年草)

〔念者〕男色關係に、兄弟を念者といひ三分
を若衆と云ふ。丹波興作のこの文は、三吉
五藏で馬追となり、若衆語を結んだことな
か、「生えぬきの念者」と言つて平氣な所に感
深い。尤も若衆の若の言としてはむしけてあ
るやうなれども、具さに容ゆる辛酸を寓めた
身にはない。念無う早かつた(松風)

***ねんない** 念無う早かつた(松風)
〔念無〕思ひがけない。この語は振發狂言の中
に多く見え、本願抄にも「行方見生ひぬ、念
無しとあきれたる程に」と見えてゐる。
ねんぶつ ころ その振手面白い、我
我は名ある鎌倉武士、振るか振ら
ぬか、立替り入替り念佛講の、か
れの威光貫うて見せん(曾我虎磨)
〔念佛講〕百萬遍ともいひ、婦女を輪誦する
こと。